

第 6 回
インクルーシブ保育プラスワン
～幼児編～



講師 赤塚 めぐみ 氏

気になる子どもをクラスの一員として育てる

はじめに

幼児期は、乳児期の子と大人が1対1の関係を深めながら培った人間関係を土台に、集団を意識する時期です。この過渡期をどのように過ごすかによって、クラスの一員として自分の居場所を見つけられるかどうかが変わってきます。

統合保育とインクルーシブ保育の違い

幼児クラスの保育者は、集団を作っていく中で、様々な発達段階の子どもと関わり、インクルーシブ教育をしています。

統合保育というのは、多数派の障害のない子どもの中に少数派である障害のある子どもが含まれるという考えの古い保育スタイルです。多数派の子に標準を当てて保育し、そこに当てはまらない子は、年齢相応に生活できるためにと、子どもにがんばらせてしまうことが多くありました。障害のある子が年々増えて、少数派ではなくなり、保育者の手が足りなくなっています。

最近では、様々な障害者差別や家庭の多様化、地域の多様化から、インクルーシブ保育という多様な子どもたちを集団で保育するという考え方が主流になりました。保育者は、クラスという一つの集団として捉えなければならない場面もありますが、個々に多様な支援が必要になります。

発達における2つの個人差

多様性を考えると、個人差の問題が出てきます。個人間差と個人内差という2つの側面で捉えます。

療育センターなどで心理検査を取ったとき、IQや発達指数などが出ます。その数値で、同じ年齢の他の子どもと比べることが個人間差です。一方で、WISCなどの発達検査は、その子の得意なことや苦手なことの個人内差も知ることができる検査です。月齢が大きくなるにつれて、他の子に比べてどうかという個人間差に着目しやすくなるのですが、幼児期は発達のスピードの差が大きいため、ひとり一人の個人内差に丁寧に向き合うことが大切です。

見える個人差と見えない個人差

まわりの人から見える個人差と見えない個人差で、支援のポイントが変わります。見える個人差としては、背が高い、低い、眼鏡をかけている、かけていない等があります。見えるので理解しやすく、支援につながりやすいです。見えない個人差とは、触覚過敏があり、くすぐり遊びをすると嫌がって泣き出す等です。そういう子は一見わからないので「なぜ、くすぐり遊びになると泣き出してしまったんだろう。」と思われがちです。本人は、それが当たり前のことで、みんなも同じだと思っているため、特別なことだという自覚がありません。大人がそのことに気づき、橋渡しをすることが大切です。

発達の個人差への合理的配慮

目が悪い子が眼鏡をかけたり、特定の音に敏感な子は耳当てをしたりして、いろいろな合理的配慮をします。その子の困り感の程度を私たち大人が見極めることが大切です。

視力が悪い人が眼鏡をかけるときに、度が強すぎ

る眼鏡を長時間かけ続けると、頭痛や肩こりにつながり、本人にフィットしていなければ、より不調を引き起こしてしまいます。度を弱めてしまうと、今度はよく見えなくなってしまいます。支援も同様に、過剰にするとよくない影響を及ぼし、足りない支援の意味がなくなってしまいます。合理的つまり、適切な配慮にするためには子どもの行動をよく観察することが大切です。

幼児になってくると、自分の口で伝えることを促す傾向があります。しかし、支援が必要な子は、一つのことでも頭がいっぱいになってしまい、相手の立場になって考えることや前後を振り返って考えることが難しいため、話し合いがうまく進みません。そのようなときは、乳児期のように、「～だったの？」「～と、感じたのかな。」と尋ねてみることで、少しずつ振り返りができるようになってきます。こういときはこういう言い方をすればいいと表現の仕方をすることで、少しずつ自分の言葉で自分のことを語れるようになります。子どもの言葉によく耳を傾けて、その子の思いをひも解いていってほしいと思います。

支援しているのに状況が悪くなっていると感じることがありますが、そういうときは迷わず支援の仕方を考え直すようにしましょう。気にならなくなるように育てるのではなく、その子なりに快適に生活できることを目指せばいいのです。今の生活を楽しむことが大切です。

発達凸凹の子どもの苦労

マズローの欲求 5 段階説は、人間の欲求をピラミッド状の階層にして、下から「生存の欲求」「安全の欲求」「社会的欲求」「承認欲求」「自己実現の欲求」という 5 層に分けて考える理論です。生存の欲求とは、生きるために必要な欲求で、それが満たされると次の欲求が出てきます。生存の欲求である寝たいという欲求が満たされると今度は「安全な布団で眠りたい。」となるように、低い階層の欲求が

満たされることによって、次の段階の欲求を求めるようになります。所属の欲求は、自分の居場所、自分と相手の関係性などがわかることです。それが満たされると、「自分は周りから～と、認められたい。」という承認の欲求につながります。承認の欲求が満たされていくと、「自分の力を試したい。」と自己実現の欲求につながり、初めてチャレンジしたいという気持ちが生れます。ところが、この段階をあまり意識せず、安全の欲求が満たされていないのに「みんなでチャレンジしよう！」と言われてしまうと、子どもは不安の中で翻弄されてしまいますので、一人一人の段階を見極めていく必要があります。発達に凸凹がある子どもは、これらの欲求が満たされにくい特徴をもっています。例えば、生存の欲求の食事についての偏食です。牛乳が嫌いな子が、一日のうちに牛乳を飲む時間はほんの数分なのですが、その数分すらも耐え難い苦痛を感じて、園に行くのが嫌になってしまう子もいます。次に安全の欲求ですが、触られることが苦痛で、中には痛みとして感じる子もいます。私たちでいう冬の静電気と同じと考えていいと思います。ですから、感覚過敏の子は手をつなぐときに常にこの苦痛を感じているのです。楽しいはずの遊びが、その子たちにとっては苦痛の時間になってしまい、不安でいっぱいになってしまいます。ルール理解が苦手な子は、少しでも場面が変わると違うものを感じてしまい、以前教えてもらったことは理解できても、今がそれと同じことを言っているということはわからないのです。ですから、「ぼくは、なぜ怒られるのだろう。」という思いになってしまい、対人不安が強くなってしまいます。所属の欲求では、自分のものと他人のものとの区別がつきにくい子どもがいます。給食は、ランチョンマットやトレイを使うため、境界線が見えやすいのですが、遊びになると境界線が見えにくいので、トラブルになってしまいます。統合保育だったときの「多数派が個を理解する」という考え方ではなく、「一人一人理解の仕方が違うため、安全に生活でき

るようにルールの示し方を工夫する」というインクルーシブ保育の考え方が重要になってきます。時間がかかってもきちんと理解できれば充足できますので、適切に育つことで社会参加を促します。集団生活に早く馴染めばその子がきっと楽になると思っ
て、わからないときに過剰な支援をしてしまうと余計に深刻化してしまいます。背中を押しているつもりでも、本人のペースに合わないと「集団って、大変なだけだ。」という恐怖でしかなくなってしまいます。不適切な環境を与えるとどんどんその状態が悪くなってしまいます。ですから、個のペースに合った関わりが大切です。

子ども相互の理解を示す

その子なりの苦労を知り、個に合わせた支援に着目し過ぎると個別支援が多くなり、保育者の手が足りなくなってしまう。集団生活で大切にしたいことの一つとして、子ども相互の理解を示すことが重要になってきます。相互理解を示すための5つの段階を踏んでいくとよいでしょう。

気づきの段階では、「あの子、みんなと違うね。」となり、次に「どこがみんなと違うんだろう。」「どうしてそうなるのかな。」と知識化の段階になります。子どもたちだけの観察では足りないため、保育者が言葉を添える必要があります。それが、情緒的段階になってくると「どうしても受け入れられないときって、あるよね。」と情緒的に共感していきます。その後は、態度形成の段階として「どんな工夫ができるのかな。」と協力できることを考えるようになります。もちろん、「こうなったときは、落ち着くまでしばらくそっとしておこう。待っていよう。」ということもするようになります。どうすればその子と、穏やかに友達関係を継続して過ごしていけるのかということを経験的に考えられるようになったら、「あの子は、確かにすごく怒ってしまうときもあるけれど、それ以外はぼくたちと何ら変わらない仲間の人だよ。」という受容的行動

の段階に入っていきます。子どもたちだけでは、うまく段階を踏んでいけないので、保育者がその場で声掛けや橋渡しをしていくことが大切です。

よきバディ(相棒)の存在

昔からよくあるしっかり者の子が、お助けマンになるのではなく、受容的な仲間関係を築くことができ、発達凸凹の子の必要な部分を補い合える子の存在をよきバディといいます。

私が、ある体の不自由な車いすの子の食事の介助に入ったときのことで、いつもの介助の様子が変わらず手伝っていると、一人の女の子がやってきて「この子は、時間が掛かるけれど自分でやりたいんだよ。本当に困ったときは、『手伝って。』って言えるから大丈夫。」と、教えてくれました。その子は、車いすの子と仲がよく、日々車いすの子のこと、周りの保育者の関わり方をよく観察していました。対等な関係で、信頼関係が築けているからこそ、けんかもできる素敵な関係でした。保育者は、本当に困っているときだけ手助けをし、子ども同士で助け合うことを大切にしていました。お試し行動のある子には共感性の高い子、パニックになる子には穏やかな子というように、子どものいろいろな相性が絡んできますので、普段からの子どもの表れをよく見て適切な橋渡しをしていく必要があります。

所属感の芽生えを助ける

- ① 保育者による「安心・安全」の保障は絶対条件
 - ② クラスの中で、安定したやり取りのできる友達を見つける(よきバディ)
 - ③ バディとの結びつきが深まる中で、他児への気づきが芽生える
 - ④ 複数の子どもの意識が高まると、生活や遊びの中で楽しみができる
 - ⑤ クラスの皆と過ごしたい気持ちが芽生える
- 感情のコントロールが難しい子は、大好きな先生や大好きな友達ができ初めて、何とかして気持ち

に折り合いをつけようとしています。

よくある失敗例

一見、よさそうな言葉掛けもよく考えて使わないと子どもとの関係が崩れてしまいます。

「ダメ、そうじゃない。」という禁止の言葉は、やりたい気持ちを否定されたと感じてしまいます。

「何度も言われているよ。」は、何度言っても伝わらない伝え方をしている証拠ですので、視覚支援やジェスチャーにして伝え方の工夫をしましょう。

「みんなの迷惑だよ。」という言葉は、集団において自分は価値がないと感じてしまいます。大切な存在であることを意図的に伝えるようにしましょう。

「嘘はダメ。」は、まず正直に伝えたらいいことがあったと思えるような経験を積むことが大切です。

クラスの仕組みをリフレーミング

みんなが心地よく過ごせるためにクラスの仕組みを見直すことが大切です。

パターン A は、ルール服従型で、ルールに従うべきという考え方なので、保育者主体のクラス経営になりがちです。子どもが適応できていなくても「ルールだから仕方ない。」と納得するので、ルールができた背景まで意識しなくなります。一方、パターン B は、子どもが適応できていないと「どうして、このルールができたんだろうね。」「ルールを守るとどうなるのかな。」と考えるようになるため、自分たちの人間関係がうまくいく工夫をし、子ども主体のクラス経営となります。

自己選択・自己決定への支援

子どもにどのような支援が必要か判断するための RTI モデルは、逆三角形をしており、第 1 ステージ、第 2 ステージ、第 3 ステージという三層で子どもを捉えています。第 1 ステージは、保育者が語り掛けたり見本を見せたりしたときに「こうすればいいのかな。」と自分なりに考えて、順調に反応

できる子どもを示します。小学校では、この第 1 ステージの子どもは、全体の約 8 割を占めています。第 2 ステージは、保育者の一斉指示が、一度では理解できないが、個別に声をかける等、ひと手間かけたらスムーズに動くことができたという子どもたちを示します。これが全体の 15%を占めています。第 3 ステージの子どもは、一斉指示では伝わらず、個別で声をかけても動けないため、より個別的で一層、具体的な支援が必要な子どもたちを示します。第 3 ステージの子どもほど、手厚い支援が必要で、一つ一つの支援に細かいステップが必要です。集団から遅れてしまいがちなので、どうしても手をかけ過ぎてしまうため、子どもが自分で考えて動く機会をうっかり奪ってしまいがちになります。主体的で対話的な経験を増やして欲しいと思います。子どもたちの行動や気持ちを保育者が言語化すること、保育者の行動や気持ちも言語化することで、子どもたちは、自分のこととまわりのことがわかりやすくなります。

おわりに

インクルーシブ保育は、障害の有無に関わらず、一人一人背景の違う子どもに必要な支援をしていく多様性に対応した保育です。育ち合う集団にしていくには、対話が不可欠です。子ども同士の対話を大人が橋渡ししていきます。反対意見を取り上げることで、気持ちの折り合いをつける方法を学ぶ機会となりますので、子どもたちなりのいろいろな意見を言える土壌づくりをして欲しいと思います。そして、そのような中で子どもたちが成功体験を積み重ねることができるとクラス集団として、良い保育ができるのではないかと考えます。

第 6 回 焼津市保育者資質向上研修会
令和 4 年 11 月 18 日 (金)
会場：焼津市役所 会議室 1 B